

季刊 連句 第27号

平成元年十二月一日発行



奈良茶三石六斗 (南柏雑記 25) 1
 旅三章 (つづき) II 写実 III 残酷な春 草間時彦 2
 「薫の羽も」の巻 鑑賞 (VI) 東 明雅 4
 第六回 武翁賞発表 (平成元年度) 8

第九回 俳諧芭蕉忌 第三十一回 猫養会 11
 正式俳諧興行 脇起り二十韻 初しぐれ 中川 哲 捌
 二十韻八巻
 捌 市野沢弘子・上月淳子・雑賀 遊・下鉢清子
 瀧川雅代・速水昌子・東 明雅・本屋良子
 文 下坂元子・若尾よしえ

「養虫」付勝練習二十韻 16
 沙羅の会 歌仙四巻 18
 捌 東 明雅・上月淳子・副島久美子・原田千町

江戸東京自由大学 22
 江戸俳諧早わかり・連句クイズ百点満点... 東 明雅
 口用心 お客倦かすな 句を貰え..... 式田和子

新庄市全国連句大会記 内田麻子 28
 雁帛往来 29
 新刊紹介 28

表紙 (猫) 宮崎龍火子

奈良茶三石六斗

南柏雑記 25

雅

A・C・C (朝日カルチャー・センター) で、「一座の法」について話した時、次の芭蕉の壁書と言われるものが取り上げられた。

- 一 席にして壁によりかかり眠るべからず
- 一人の煙草をのむべからず
- 一わが門の人は奈良茶三石六斗くはざるうちは俳諧上手になるべからず
- 一 無分別の場に句作あることを知るべし

流石に芭蕉の教えらしく俳諧の座を教えるに、具体的に平易で親しみやすく、俳味があって、聞いている人たちの間に自然に笑いがおこったのも当然である。ただ、この奈良茶三石六斗については、さまざまな意見が出た。奈良茶は奈良茶飯、茶飯の中に大豆を炒ったものが混じっていて、香ばしくておいしかったと言う人も居り、まずくて困ったと、いかにもまずそうな顔をして、思わず皆が失笑するよくな場面もあっておもしろかった。後日、式田和子さんから、「嬉遊笑覧」のコピーが届き、「芭蕉は神様のような感じがしますが、けっこう流行のものなど知っていて、お説教に取り入れていることなどが分かり、面白く思います

た」と言われてこられた。奈良茶店が江戸で流行したのがちよど芭蕉の頃だったというのである。

だが、芭蕉はそんな茶店に行って銭を出して奈良茶飯を食ったのではなく、かねがね、自分の庵でよく茶飯を喰べていたのではなかったろうか。私はそう思う。そもそも三石六斗の茶飯を食べるには何年かかることだろう。杉内徒司さんの説では、人間が一年にたべる米の量はほぼ一石だそうである。しかし、これは普通の人が普通にたべる時の話で、俳諧師が茶飯で食べる時は、凡そ常人の半分位と見るべきではなからうか。そうすると、三石六斗は平人ではぼ三年半、俳諧師などの世捨人なら、七、八年はかかる分量であろう。

私の師匠根津芦丈先生はいつも、「連句は十巻まいて一稽古、百巻まいて明るみに出る」と言っておられた。それも何年かかるか、換算してみたことはないけれども、十巻まくには、初心のころなら一年はたっぷりかかることだろうし、百巻となれば、それからスピードは上がったにしても、ほぼ七、八年はかかるだろう。やはり、この位は最低の年月が必要ではあるまいか。近頃はスピード時代、速成栽培の時代だといので、十巻どころか、二三巻まけばすぐすべてが分かったような顔をする人が多いけれども、連句も味噌と同じで、じっくり熟成してこそ、よい味が出るというものである。

旅三章

(つづき)

マドリッドで、もっとも感動したのはブラド美術館だ。半日かけて見て、その翌日、もう一度、親に行つた。そして、もう一度見たいと思つたが、その時間がなかった。中心をなすものはグレコ、ベラスケス、ゴヤの写実の絵である。グレコが十六世紀後半、ベラスケスが十七世紀、そして、ゴヤが十八世紀である。

「あまりにも真実過ぎる」

「私は真実と現実がこれほどまでに一枚の絵に表現されたとを未だかつて見たことがない。私は自分の顔がこれほど醜かったことを知らなかった。また、この残酷で露わな醜さを私の前に敢て示し得る人間がいるとは知らなかった。」この有名な言葉はベラスケスの肖像画「教皇イノチエンチオ一〇世」を前にした教皇自身の言葉である。この絵はブラドにはないが、ベラスケスの傑作が多く並ぶ室には佇ちつくした。又、ゴヤの「マドリッドの一八〇八年五月三日・平和の王子の山における銃殺」からも強い印象を受けらるべきだ。

私が感じたことは、日本人には写実を追求するという性格がないということだった。よいとか悪いとか言つて

はない。日本の絵画には写実追求の精神も手法もない。文学においてもそうである。それは何故なのであろうか。風判らない。俳句の立場から言えば、写実が存在しないところへ、正岡子規が写生を持ち込んだことも興味深い問題だと思ふ。

私はスペインの夜、ホテルのバーでシェリーを飲みながら、しきりに考えた。流石にスペインのシェリーはうまかつた。

写生ということの子規に教えたのは海外留学から戻った画家たちだった。当時のフランスの美術は写実一途から印象派に転じようとしていた。だから、彼らが学んだ写生はデッサンであり、絵画のテクニクとしての写生なのだと思ふ。少くとも、写生が絵画の本質ではなかった筈である。子規は絵画の手法から、写生を俳句に、短歌に取入れようと試みた。それが、いつの間にか、写生が俳句の本質のようになって言われるのはどうしたことだろう。俳句の歴史、日本の詩歌の歴史で、写生ということは存在しなかった。その存在しなかったものが、本質となるということは、どうしても奇異である。

しかし、俳句で写生が大切なことはよく判っている。連

句の場合もそうである。今の連句人は写生が下手である。例えば恋の句で、女性の姿を眼前の実存在のごとくに浮かび上らせるのが写生の手法である。写生がないと、連句が観念的になるのだ。

それにしても、同じ子規の提唱した写生文があえなく消えてしまったのはどうしたことであろうか。

私の今回の旅行は旅行会社のツアーである。団員達はフラーメンコを見物に夜の巷に出掛てしまつて、ホテルに残っているのは私達夫婦だけである。家人は疲れたと言つて寝てしまった。シェリーののお替りをして又考えた。「あまりにも真実過ぎる」ような写実は日本には存在しなかったのである。明治以前においても、西欧文化が入つて来てからでもある。むしろ、そういうことに日本芸術の特色があると思われるべきではないだろうか。シェリーの酔が生んだ結論ベラスケスやゴヤのような写実派の国から、ふと気付いた。ソヤダリのような絵が生れたのだから。おかしと思つうちに睡くなつた。

III 残酷な春

今度の旅に出掛けるとき、着るものはどんなものを持って行くかで、頭をなやました。六月の初めである。ある人は「夏服でいいですよ」と言つた。ある人は「セーターは必ず持つていらつしやい。冷えてむ日があります」と教えしてくれた。行つてみたら、どちらも正しかった。朝と夕方

は冬を思わせるような冷たい風が吹いた。夜はコートが欲しくて、上着の襟を立てることもあった。昼は暑かった。アメリカ人らしい旅行者はショートパンツにTシャツで陽気に騒いでいた。

マドリッドで在留の長い友人に尋ねたら、彼はこう言つた。「一日の間に冬の気候と、夏の気候が交錯するのが春です」この言葉は印象深かった。長閑、うららかな、日永などで私達が知っている春は存在しないのである。冬が去つて、夏が来るまでの二、三ヶ月の春を私達はたのしんでいる。「行春」や「春惜む」はそのたのしさから生れた季語である。しかし、ここにはそういう春はないのだ。

このごろの日本の建築ではウォーキングクローゼットと言つて、歩いて入れる広い洋服庫を作ることが流行している。つまり、日本の主婦が、そこに春夏秋冬の衣類を吊つて置けば、冬と夏の入替えをしなくて済むということなのである。これは要するに主婦の不精である。しかし、一日の間に冬と夏が交錯する国では、夏服の隣りに毛皮のコートを吊して置かないと、ものの役に立たない。赤道に近い国では、「ここには四季はありません。雨季と乾季があるだけです」という。今年の十二月、私はフランスと西独に行かなければならない。このあたりは本格的な冬の筈である。欧州の本格的な冬がどんなものかたのしみにしている。海外の旅はたのしい。遠くから日本を見るということは、いろいろ考えさせられることが多くて、決して無意味の旅ではない。旅行メモからの拙文。お役に立てば幸いである。

昔ながら花に並ぶる手水鉢

ひとり直し今朝の腹だち

去来

(現代語訳) 昔の生えた手水鉢を花陰に並べたりして、庭いじりをしてるうちに、今朝からの腹立ちもひとりでおさまってしまった。

(付心) 其人の付。前句の人物の心理状態を描いたもの。(付味) 前句に見られる満足感が、付句の立腹解消というところと響き合っている。

(転じ) 打越の清雅な叙景の句に對して、これはやや滑稽味をおびた人情の句である。これで上品だった気分を變化させている。

(補説) この句はずばりと人情の機微をうがち、適切であり、ユーモアがあり、万人の共感を得るところであろう。重厚な性格の持主といわれる去来に、この一面があったとおもしろい。

ここでも異時分の打越が行なわれている。臘夜と今朝であるが、3と5にも朝と宵の打越があった。念のため注意しておく。

以上で裏十二句が終った。この裏は、墨絵をかきなぐる孤高な人物に始まり、手水鉢に花を並べて、ひとり腹立のおさまる人物に終っている。この首と尾との間の十句も、めりやすの足袋の履き心地をめで、何事も無言がよいと考え、水前寺海苔の吸物を愛で、盧同が下男の動静に関心をもち、その間に、芙蓉の花や、月の臘夜の色どりを添え、午の貝ふくりとか、したたるい寝蓐座を干す景とか、三里あまりの道を行く用事とか、俗なものが少しは混っているけれども、大筋においては、静寂・閑雅を愛する隠遁的気分が流れていることを否定できない。この流れがいわゆる猿蓑調の根幹をなすものである。だから、一見してすこし単調のように見えるけれども、よく読めば読むほど、芭蕉をはじめ、一座の連衆が細かな神経を使って、付味・転じに微妙な色彩と變化を付けていることを知って、感嘆

せざるを得ないところが多い。

また表六句を序の段とすれば、裏の十二句は破の一段である。表六句で禁ぜられていた神祇・釈教・恋・無常・懐旧・述懐、その他、地名・人名など一斉に解禁になるが、ここであまりあはれすぎると、破の二段である名残の表十二句で息切れがして、一巻全体が盛り上らない。その点から見ても、この巻の裏十二句はほどほどの自由と變化を味わせてくれ、まさに歌仙の手本というべきであろう。

19

ひとり直し今朝の腹だち

いちどきに二日の物も喰て置

凡兆

(現代語訳) 朝からの不機嫌もいつの間にか直ってしまった、けろりと忘れ、気がむくと二日分の食物を一度に食ってしまっ。

(付心) 其人の付。前句の人の習性について述べている。(付味) 前句にあるおかしみのうつり。

(転じ) このところ、浮世ばなれした老境の人物が続いたので、男盛りの元気旺盛な大食漢を出し、また、滑稽の気分を出した。

(補説)

「いちどきに」は同時に、一度に、一時を重箱読みしたもの。

「二日の物」は二日分の食料。当時の扶持米は男一日玄

までであるが、「芙蓉の花のちるよりこゝに至て八句、人倫と居所のみの変化にして、格別のものをいたさずと、へども、毎句(転じ)する」

米五合、女一日玄米三合が標準であった。精米すればずつと減るが、それでも、相当な分量であり、若い者でなければ食べられぬところであろう。古注の言うように、車力・日傭・飛脚の類、大方は独身者の我俣な生活と見るべきであろう。

また、「食て置」と読まないで、「食て置」と読むべきだという説がある。古版本には振仮名が付いていないので迷うのである。浪本沢一氏は「芭蕉七部集連句鑑賞」において、「置き」では軽く俗にすぎ、「置く」の方がよいとされるが、私はやはり「置き」と読む方がよいと思う。それはこの件について阿部正美氏も「芭蕉連句抄」第八篇で言っておられる通り、この句の前後に韻字留(名詞・代名詞などで留めるもの)が多く、變化をはかる為には、連用形を使った方がよいというのと、さらに私はこの句の軽さがあって、次の史邦の句が対照的にどっしりして生きて来ると考えるからである。

この付合の解釈にはなお、いろいろ異説がある。居候など平素三度の飯も十分に食べていない者が二日分の食事をして機嫌が直ったと、逆付に見るという説があるが、そのように前句、付句を原因・結果として解するのはおかしし、また、逆付ということについては、この巻、発句・脇の付合の時すでに説明した通り、逆付という語そのものが問題である。

古注を見ると、この主人公を、あるいは任侠のやからと見、あるいは養子聳を尻に敷いた我俣女と説くなど、実に

(補説) 「雪げ」は、雪が降り出した

の付会たつとぶべき所なり。近來辺鄙の誹士、蕉門と称するものも、其語のひろからざるをおそれ、句ごとに城市村を落とむれども、地位おなじ所にあるに似て見るにたへず。初心の人、古今上手の集を見て深く工夫を用ふべし」といふ。「猿蓑四歌仙解」の鈴木荆山の言は、まことに肯綮にあたるものであり、至言であると思う。

20

いちどきに二日の物も喰て置
雪げにさむき島の北風

(冬。雪げ。人情無)

史邦

(現代語訳) 雪もよいの寒い北風が島に吹き荒れる。このような時には二日分の食事を一度に食うようなひどい事態もあるのだ。

(付心) 前句を不自由な生活をする人と見て、その会釈に孤島を出した。其場の付。また天相の付。
(付味) 前句の異常な気分が、付句にひびいてる。響

(転じ) 打越・前句のユーモラスな気分が、この句によつて、凄絶・悲壮なものに一転している。この転じは実に見事である。

21

雪げにさむき島の北風
火ともしに暮れば登る峰の寺
(雑。人情目)

芭蕉

(現代語訳) 雪もよいの北風に寒い島の冬であるが、そのような時も日が暮れると、峰の寺に灯をともしに登るの

つね。

(付心) 起情。面影付(補説参照)。

(付味) 暗い山道をひとりたどって行く心細さと寂しさが、前句の荒涼たる気分によく合っている。移りと見えてよい。

(転じ) 同じ前句を挿みながら、打越は異常な生活の物々しさを描き、付句は寂しい孤独の気分転じている。同じ人情目の句であるが、その境涯・気分が全く変わっている。停滞感がない。

(補説) 「押よふてねては又たつかり枕 火とほしにくるればのぼるみねの寺 ケ様の句ども、たれぞの面影に立申候句にて御ざ候。尤、他流にもケ様之句ども御座候へども、何の心もなく仕たると、心をよせて仕たると、付肌各別の意味出申候」(「浪化宛去来書簡」)、右の文章は去来が、元禄七年(一六九四)五月、越中井波の浪化上人に宛てて記した俳論書簡の一節である。これによれば、「火付けられたもの」といふことができる。面影とは歴史上の故事や古歌などを使って付る場合、それとはっきり表面に出さず、おぼろげに表現して、しかも読者にはすぐそれと感

じさせるような付け方をいう。この句については、前句から佐渡または隠岐などが連想され、承久乱(一二二一)によつてここに流された順徳院または後鳥羽院などの悲しい運命(「増鏡」)が思いおこされる。去来は、おそらく、これらの史実を脳裏におきながら、この句を作ったのである。この巻には、名残の裏三句目「押合て寝ては又立つかりまくら」があり、これも面影の付とされている。その他にも、面影付ではないかと思われる句が一二あって、この面影付が多いというのも、この巻の特色の一つである。さらに言えば、既に説明した裏の九句目、「この春も盧同が男居なりにて」にも、文学史上、有名な人物が登場する。しかしながら、この句の場合ははっきりと盧同という個有名詞がかかげられているので面影付とは言わない。面影付ははっきりその人の名前が挙げられていないので、読者は自分の知識を綜合して推測する。そこにまたおもしろみがあり、深みもある。さきほどの去来の手紙の一端に、「すべて面影の句には、落涙可仕句ども多く御ざ候」と言っている。去来がいかに強い感情を移入して作句し、また句を味わっていたかを物語るものである。

7

三版 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

東京堂出版

定価三五〇〇円。

歌仙 秋暑し

大窪 瑞枝 捌

賞状 副賞 金五万円

坂本 孝子・山口 みづゑ
中川 哲・下坂 元子
仏淵 健悟

佳作 歌仙 聡多き日

文音 八木 聖子
矢崎 藍

応募作品数 歌仙 十三卷

二十韻 一卷

選考委員

東 明 雅
草 間 彦
杉 内 徒 司

歌仙 秋暑し

大窪 瑞枝 捌

秋月

マンションを曲がりマンション秋暑し
①月待つほどに渡る初風

濃りんどう今をさかりと摘むならむ
ピアノの稽古母もつききり
刷り上げし案内状の香りたつ
汗の作業衣さっぱりと脱ぎ

髪結き娘の軽きステッパ
はじめての唇づけ何故か哀しかり
福祉奉仕で留年となる

冬月

消費税貰ひませんと張り紙し
馴れし狸の遊ぶ背戸裏
水垢離の禪も凍る坊の月
アマチュア写真カメラ斜めに
試作車の秘密きびしき黒テント

花

街の鳥の追へどきりなく
一身に花浴び明日もかく生きむ
ちりめんじゃこをまぶすおにぎり

瑞枝 元子 孝子 健
元子 孝子 健 哲

古代製商ふ店の春火桶
また起こりさうひどい喘息

NTTプッシュホン式勤めに来
向ふ三軒みんな知らない
夕立雲忽ち隠す八ヶ岳
むんむん匂ふシェイブローション

たまさかに逢へば狂ほしひとの妻
あっけらかんと風俗令嬢
円札を入れて故国へ文つづる
塩煎餅の洒落た包装

アトリエのキャンバス濡らす月の光
瘦かまきりの斧に驚き
うそ寒の肩くぐまする老神父
厨仕事は鼻歌も出て

ひもすがら陶土搗く音村中に
つくしの萌ゆる寺子屋の跡
花爛漫練習船は総帆す
望遠鏡を磨くのどけさ

平成元年八月二十一日
於 マンション白金台

元子 健 孝子 同 哲 元子 健 瑞枝 元子

どの作品もこじんまりとよくまとまっていた。しかし、力が無く、詩のひらめきも乏しかった。

一句一句の付け方はしっかりしているのだが、三十六句全体の流れがぎくしゃくとしていて、一向に盛上りが無い。捌が連衆に遠慮しているのではないだろうか。とにかく、捌がもう少し、しっかりしていればよいと困る。

この賞は年度賞であり、新人賞的性格もある。従って、作品に未来性を感じさせるものが欲しかった。その点では愛知から応募の諸作の鮮度がよかった。

個々の作品についての評価は遠慮したい。連句のたのしきは製作過程にあるのだと思う。だが、賞の選考では、そのたのしきは判らない。原稿用紙に書かれた作品を見て賞を決めるということが、果して、連句の本質と矛盾しないのか、どうか。そのあたり、いささかの疑いを持っている。

(終)

本年度の武翁賞応募作品は、歌仙が十三巻と割合に多かったのに対して、二十韻は僅か一巻であった。これは日ごろ二十韻に力を入れていた私としてはショックであった。原因がどこにあるか検討中であるが、来年度は振って応募していただきたい。歌仙は全巻が水準以上の作品で、選ぶのに苦労したが、その中で、「秋暑し」はベテランに新人を交え、それぞれの持味を生かして、一巻に生気が漲っていた。この巻と最後まで競った「初燕」の巻も大体同じようなメンバーの作品だったが、付味と修辭に問題があり、残念であった。佳作となった「恥多き日」は文音、大きな傷がないので、奨励の意もかねて取り上げられた。折角の二十韻「秋風」は連衆九名という大人数では、形の上からも落ちついた作品を望むことは不可能であろう。

武翁賞は今回で六回目となった。当初の目的であった新人の養成も一応めどがついたと思うので、このまま存続するか否か、検討するつもりである。

武翁賞選考は楽しい。三井武夫氏から連句の手解きをうけた二十余年前の初心時代を思い出させて頂ける機会だからだ。しかし、十四作品でも選考というものはむずかしいと毎回思う。蕪村の「行春や撰者を恨む哥のぬし」が沁みじみ思いおこされる。

この二、三年小林秀雄の短いものをよみ返して気持を整えることにしている。今度は戦時中に書かれた「西行」「実朝」「平家物語」に縋って予選に当たった。予選作業は家で一日を費やす。選考方針は年来の主張通り、文音ものは採らず、首尾の作品を残すこと。

各グループ中の佳作を残し、式目等を勘案して次の四篇を選んだ。

中島啓世例の二作品からは「炎屋」「猫養会関係では「秋暑し」「初燕」

これも俳諧衆七作品からは「虚空」「戸谷是公例「夏深し」は残さず

さて、選考会議で右の四篇を強く推し、別項のような結果となったが、満足している。

第九回 俳諧芭蕉忌

第三十一回 猫養会

平成元年十月十八日 於 深川芭蕉記念館

脇起り二十韻 初しぐれ

中川 哲 捌

役割

旅人とわが名呼ばれん初しぐれ
残る紅葉に混じる山茶花
硯箱蓋に作者の銘ありて

みんなて困む宅配のピザ
手づくりのオカリナ吹けば月昇る
秋の袷の襟撫でる風

逢ふごとに病める蜚か身の細り
地下鉄階段車飛びこむ
浅草寺婆の一団ぞろぞろと

猫可愛がりとても心配
ほどのよきピールのジョッキ飲みほしぬ
夢は流れるセーヌ流れる

浮世絵の役者の鼻の大きかり
伽羅たきこめて障子洩る月
学生の身分ではった恋の意地

砂の箱舟いつか崩れて
天使魚ひねもす眺め所在なく
とめてとまらぬ笑ひしゃっくり

花万朶山城あとの三つ物碑
膝送りにてあそぶ踏青

役割

明 雅 翁
正 江 哲
千 町
啓 世
麻 子
元 子
好 敏
久 美子
よしえ
淳 子
雅 代
利 子
清 子
健 悟
澄 子
昌 子
あかり
執 筆

宗 匠
脇 宗
執 筆
知 司
副 司
座 配
座 配
花 司
香 元
同 硯
老 長

中 川 哲
中 島 啓
福 井 隆
式 井 秀
豊 田 好
内 田 麻
同 坂 右
下 元 子
山 崎 一
副 島 久
原 田 千
梅 田 利
若 尾 子
杉 江 よし
江 杉 亭

鞍壺に小坊主乗るや大根引

残る蝗のひそみふる徑

このごろは宅地造成やみくもに

ウエッジウッドのティカップ出し

月の出を待ちてギターを爪弾かん

肌寒ければ背によりそふ

黒き服胸に真珠の露つらね

エリーを唄ふ筆碌の人

壁を越え難民の群ぞくぞくと

鷗の翼浮かんで消え

水中花音なく開く街あかり

月の祭のちよっと一杯

森下の伊勢喜の爺の赤ら顔

マグニチュード6の激震

親分の女と知らでどうしよう

薔薇の刺青ちらと内股

巡礼が居つきて堂に外廁

春一番が山の町吹く

鬼瓦花のひらひら夢模様

鶯笛にわらんべの息

翁

明雅

鈴子

凡

美奈子

恭子

朋子

龜

奈

朋

鈴

龜

奈

朋

同

鈴

朋

奈

鈴

鞍壺に小坊主乗るや大根引

ふはふはと飛ぶ原の綿虫

掛軸の頼まれし賛思案して

汽笛の響く玻璃戸開けたり

暗ひも寝入りばななり月の宿

サルトル読めと夜学子の彼

ペディキエアの脚に触るればるのこづちり

逃げしお猿にばったりと会ふ

古びたる玩具に傷の残りゐて

殿下は未だ河川図を描く

献上の酒たいせつに水室守

宵宮飾る弓張の月

振り向けば視線を逸らす銀ながし

ぬしのためなら左棲とる

シナリオにイチャモンつけしディレクター

シスコの地震で株価心配

一億を出して養老院に入る

ふらこ揺れてぼろり黒鉛

からくりの人形の舞ふ花日和

初鶯に耳をすましぬ

翁

良子

隆秀

あかり

健悟

志げ子

秀

悟

同

同

り

秀

同

秀

り

秀

り

良

げ

第九回俳諧芭蕉忌はよく晴れた晩秋の陽ざしの中、恒例の深川芭蕉記念館で行われた。

考えてみると正式俳諧として芭蕉忌が興行されたのが昭和六十一年の第六回目、私の猫養歴もこの時が最初である。而も今回は思いがけず座見を仰せつかったの出席であるから、四回目の柴の戸をくぐるのも何となく緊張する。足に故障のある身を、明雅先生がお心を配って下さり楽な役を割りふって下さったのだが、生来気のきかぬぼんやりで、まことに到らぬことばかりではあったけれど、今迄とは又違った目で真剣に式の進行に没入することが出来た。昨年に続き今年も執筆は女性、式田和子さんのお役とあれば一層興も深い。宗匠のお声に、すらり文台を左右の手に立上った和子さんの引しまった表情、美しい足捌きで紫の袴が目の前をよぎって行く。古格に則った落着いた挙措、高く張った吟声。又衆目を集めて紅葉した雪柳の枝に白菊を添える

配観の役をお受けして

若尾よしえ

花司の鉄の音、香元の捧げ持つ香炉から漂いたゆたう沈の香、真白な障子に映る秋の日、暫しタイムスリップして何もかも忘れらるひときぎであった。付句が始まってからは座も和み、面白いハブニングもあって一座に笑いが流れる楽しさ。今回は配観が三人となり、一度にお三人が立ち重ね観の重さを感じさせることもなくつかず離れぬ美しい作法で配観をなされた。私座見の役は席入り前、旋書、席札を確認しあとは坐っているのだから、この様な呑気なことも言えるのだが、それでも終った時はすっかり汗ばみまだまだゆとりを持つにはほど遠いことを感じた。

古き良き日本文学の伝統の、一筋の糸を絶すまいと願って始まった猫養会の正式俳諧興行の大きな意味を考え、連句の世界の奥深さ尽きぬ面白さを思い、作品の詩としての向上を念じた。

恰も翁の奥の細道三百年に当り、私の中で一つの良き点となった今年の時雨忌を大切な記念として行きたい。御指導下さった明雅先生御夫妻、先輩の皆様、裏方としてお手伝い下さった方々に心から御礼を申上げる。

八月半ば、明雅先生のお電話に驚き乍らお受け致しましたものの、さあ大変、着物が皆様の前に立たねばと思ひますと、髪はロングでなければおかしい等と気になり、翌日パーマ屋さんとんで参りましたら二ヶ月かかりますよ。これで一つ減点。次に我が人生にこのような晴れの舞台が控えているよう等と想像も出来ませんでしたので、自然にとばかり真黒に焼いてしまった顔の、これで二つ減点。間に合はぬ事ばかり。

兎に角今年は三人でやるのだそうですので美しい千町様とスラリと素的な利子様が居て下さるので安心、九月十七日、南柏という駅に降りました。お声がかければ、振り向きまですと秋元先生です。和風スラックスの軽装で、助けの舟、一歩も迷う事なく光ヶ丘近隣センターまで来る事が出来ました。秋元先生の一寸茶目っ気なお目に合楯を打ちまして、そこそこマーケットへ、私はおむすび二ヶとポカリスエット、秋元先生は奥の肉屋さんで揚げたての肉入りコロッケ

を二ヶ買ってきて下さいました。二人でセンターのロビーでそれを一個ずつ頬ばりお腹が温まる頃には気もほぐれ平常心になれまして、さりげない中にもお優しいお心配りが嬉しく感謝申し上げた事でございました。いよいよ、二階の広間へ上り浴衣に着替え割稽古、リハーサルです。千町様は中央正面の宗匠、脇宗匠、副宗匠、老長の席へ、利子様は右側貴人と連衆へ、私は左側連衆へ、足は進左退右、起右坐左で、重観の最初は蓋付で右向こう左手前の処作で差し出し、四席終りました時にはもう利子様が見えません。つまり私が遅すぎました。「合わせる」という事が先ず肝要、又私の場合には前かがみにならぬようにとの御注意を頂く等、先輩の方々の御助言を頂き乍ら、練習に励みました。

重観を手に、小さい硯一つ一つを紙やすりを底板に磨る等して坐りをよくしていますと、つくづくと伝統の世界に生きるよるこびがこみあげてき、これまでに保ち、育み下さる先生や奥様、又先輩の方々に厚く御礼申し上げます。当日、何とかお役目をつとめさせて頂け身に余る光栄と感謝申し上げて居ります。

養虫

付勝練習二十韻
東 明雅

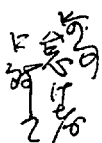
句切締切
1月20日

八句目 回教国は酒も御法度
九句目 バザールに水煙草吸ふ男たち
十句目

- 1 治定 すこし疲れて美術館出る
- 2 法廷闘争生甲斐の夫
- 3 元値そもそも只も同然
- 4 アバルトヘイトデモの群衆
- 5 定年の身のテレビ三昧
- 6 暗き瞳に黒き頬髯
- 7 イミテーションの指輪売りつけ
- 8 旗先立てて観光の客
- 9 俳句ひねりて季語に苦勞す
- 10 熱砂の果に沈む太陽
- 11 シンカバブ焼く煙もうもう
- 12 しゅっしゅっばっばと繩電車行く
- 13 耳にかしましジブシーの衆
- 14 扉の前にひそむアリババ
- 15 明日は明日とて風の吹くまま
- 16 チャドルの奥の黒き瞳よ
- 17 石の家から訪れし客

和久 良子
正雄 千雪
文子 妙子
達子 謙太郎
淑子 智子
昌子 美和
淳子 雄次郎
美幸 美幸
うせい 美鈴
治子 美鈴

※句から離れて転じをねらうべきだと思う。⑦ガイドさんが小旗をもって先にたち案内して廻るのは、日本の観光客に見られる現象だが、もう、かなり一般化していて、句に新しみが感じられない。⑧は「日本人の観光客が、熱砂の国のバザールをみて歩いていきます。俳句も下手ながら少々たしなんだりして」と、付心の説明がある。他に自を向いあわせた付けで、このような付け方もおもしろいが、すこしごたついているようだ。⑨は前句に対しての付味はすばらしいが、やはり、人情がないのが残念である。⑩これは人情他の句で、水煙草吸っている男たちの中で焼いているのだろう。シンカバブとは羊肉の串焼きである。前句によく付いているが、回教国とシンカバブが問題である。⑪「水煙草は廻し飲みとするものだそうですので、なわ電車も輪にするのと、この巻まだ子供がありませんでしたので」と付心が説明され、流石に一巻の進行に注意しての付けとなっている。ただ、御本人も言っておられる通り、このままではいささか薄人情である。⑫回教国・バザール・ジブシーと何か似たような気分のもが三句続くようである。⑬これも回教国・バザール・アリババと、千夜一夜物語の世界が続いて残念であった。⑭は完全な遺句である。バザールに集う男たちが明日は風まかせののんびりした人生観の上に立っているというのは、まさにびったりであり、その限りではよい付けであるが、やはり人情が薄いようだ。⑮水煙草を吸う男にチャドルをかぶった女性は向付で、恋の呼び出しである。恋は七句目に終ったばかりだからまだ出



17 発掘品とうまくだまされ
18 打てはびびりて年功の秘書
19 アラベスクのみ並ぶ店先
20 帽子を狙ふ鳥憎みぬ

道郎 鋭太郎
典子 典子
よしえ 典子

①は前句の男たちに対して、別の人間をもって来てつける向付の手法である。作者も「前句がなんとなく怠け者のような印象がありますので、働き者の人間を出してみまし」と言っておられる。御尤もで、おもしろいが、法廷闘争が打越の御法度と縁があり、法という字が打越に出ているので困った。②バザールの実態を穿った句で、前句との付味は大変よいのであるが、すこし人情が薄いようである。③アバルトヘイトは人種差別で、それを撤廃させる民族運動は、今日の重要な話題の一つである。水煙草を吸っている男たちと、デモに立上る群衆を向付にしたのはよいが、このような政治問題だと、やはり打越にある国家権力のイメージと結びつくのではあるまいか。④この句は作者も言っておられる通り、水煙草をテレビ画面とみての付けである。水煙草だけでなく、前句の景をテレビ、映画、あるいはお芝居の一場面と見て付けるのは、容易でありすぎるため、あまり用いないがよいと思う。⑤これは水煙草の男の会釈の付けである。このような付け方も勿論あるが、この場合は回教国のイメージがここまで尾を引いているようである。⑥いかにもバザールにありそうなことを描き、具体的に

せない。⑥「南の国のイメージから国賓として来日されたムガベ大統領を時事として付けた」よしであるが、「石の家」だけでは読む人に分からないのではなからうか。⑦そして⑧は既に⑥で述べた感想と近いので詳述はさける。アラベスクはアラビヤ模様である。⑨は水煙草吸う男たちと向付に、気働きのある年功の秘書を付けた。これは①の感想にもあったように、怠惰な前句の人物に対し、働き者の別人を対付に出したもので、付味もよく、転じも十分である。⑩は私には理解できなかった。なぜ鳥が帽子を狙うのか、そしてなぜその鳥を憎むのか、作者に一言説明していただければ、すぐ理解できると思うが、このままでは付心不明と言わざるを得ない。あとでもよいから教えていただきたいと思っっている。⑪これは一見、エジプトあたりを想像するけれども、考古学者は必ずしもエジプトだけのものではないので、前句にもよく付いているとともに打越の境地からは離れている。よい付けである。さて、治定した句は、「すこし疲れて」というところが、前句の水煙草の男たちのダルな気分につり、また「美術館出る」で回教国の気分から離れ、転じも十分である。さらに数句続いていた屋内の景からも出ることになり、上々の句であるので、この句を採用した。作者の正雄さんは脇句で一度登場しておられ、私としてはなるべく一巡を守りたかったが、これ以上、適切な句はないと思っただので、再びの登場となった。正雄さんの努力に皆見做ってほしい。次は、人情目・場の句どちらでもよく、雑または冬の句。

沙羅の会

歌仙四卷

平成元年九月二十日
於 京橋区民館

秋麗

東明雅掬

秋麗許されて入る沙羅の会
皆さざめき待つて初月
障子貼る家族揃へるうれしさに
アールヌーボー壁のポスター
船のごとハーブ揺らしてハーピスト
白い背広に白靴の人
故郷はもう知らぬ町南風吹く
産卵終へて帰る海亀
サンダースおぢさんいつもにこやかに
信号待つ間ひよんな決心
お話がうまいというのに魅かれたの
神のみぞ知る本当の事
ボージャーは振りむきもせず寒の月
菫蕪を掘る裏の山畑
いつからか使はぬ井戸に蓋をして
郵便局で配る風船
花の下社内野球の勢揃ひ
春の帽子のリボンひらひら

利子 瑞枝 明遊 雅枝 利遊 雅枝 利遊 雅枝 利遊 雅枝 利遊 雅枝

セントラルパークに遊ぶ栗鼠の群
単身赴任すでに六年
あれこれと飲んでやっぱり純米酒
「万葉弁当」ちよっと薄味
塩の嶺また塩の道信濃路に
恋を裸像に刻む碌山
コンバクトのぞき素早く紅をひき
ハミングバード宙にとまれり
宵の月ざらざらと出る猫目石
咽喉をうるほす宗祇忌の水
生涯も黄落の期を迎へつつ
客とは名のみ皆悪友
ポーカーの楯円の卓はマホガニー
哀しめって梅雨も最中に
親ゆづり悩まされある偏頭痛
辞書をひきひき書ける苗札
カラオケの遠くひびきて花見舟
蛇の群がる野辺の道草

遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊雅利遊

野分晴

上月淳子 掬

野分晴髪ふかれつつ集ひけり
今日ぞ待たるる十六夜の月
茶唄含む学童の声くぐもりて
自動車いろいろあれは外車よ
高層ビル競へる如く建ち並び
仕事になれし桐の咲く頃
じんべよりによきり出てる膝頭
嫁とり話にどきまぎとする
物云ひのゆっくりとしていちらしき
ブイドル犬の首輪真ッ赤に
哲学の道何処までも川に沿ひ
托鉢の僧整然と行く
月登る「ちよか」埋め置く囲炉裏端
輝葉ぬりこめてをり
新体操りぼんとまりと棍棒と
七年先の誘致運動
外人と見振り手振りて花の下
嬰のにぎにぎ笑ふ春興

淳一和麻正啓清
恵子子雄世麻和恵雄清和麻子世雄
子惠子雄世麻和恵雄清和麻子世雄

幾とせの織乱れたり内裏難
吸ひもせぬのに煙草買ひ置く
生き恥をかく度政治家箱がつき
飛べぬやんばるくひな飛びたつ
夫ありと知ったはあとのまつりにて
気がつけばある年下の母
あつさりと式場キャンセルしてしまひ
円\$レートどこが適当
近頃は誰でも株を買ってをり
発掘隊長髭の先生
杖つきて修那羅峠の月明く
当地名物煎りし新権
草刈らぬこともよしとや虫すだき
熟睡するは乗り物の中
御土産にビデオテープのつく世です
鮎の果離れテレビ画面で
たまきはる命の果の花吹雪
復活祭の染卵買ふ

和世清世和清世清和世清世清和世清世清和世清世清和世清世清和世清世清和

秋の風

副島久美子 捌

京橋や行き交ふ肩に秋の風
 名月を待ち集ふ小座敷
 果物盛棚の苦瓜笑み割れて
 急ぎ立てられし原稿を書く
 幼子の曲乗り上手一輪車
 蝉鳴き始む校庭の隅
 姫鱗にアイヌ伝承聞くあはれ
 金のクルスを肌につけをり
 やうやくに叶ひし愛の祝されし
 空鉄砲に逃げぬ野鴉
 網の目をくぐり慣れたる密輸団
 地下の酒場でスコッチを舐め
 寒き月ビルの林の上に出で
 たうたうたらり能初めなり
 若者の言葉さっぱり意味不明
 私は私猫は猫流
 僧に似て僧にはあらず花の旅
 畑打の人遠く小さく

久美子 代 孝 子 弘 孝 同 代 弘 孝 澄 子 子 風 子 代 孝 子 弘 風 澄

蝶渡る水満々のダムサイト
 発破の刻をきざむ短針
 鳴り続く「いのちの電話」受けそびれ
 家政婦雇ひ励むお仕事
 敵かくし子供かくしてモデル業
 浮名三千後悔はなし
 さみだれに彼の人恋ひし夢恋ひし
 パイナップルのちよっと酸っぱく
 消費税どこまで見直し効くのやら
 定期で通ふ父の病床
 雲間より洩るる月影仰ぎ見る
 運動会の用意万端
 唐黍の網に焼かれる香ばしさ
 友に誘はれロス街の裏街
 財をなし名を得て吾は身も軽く
 紐付けしままふうせんの飛ぶ
 花盛り記念植樹の若木なる
 のどかに奏つ銀のフルート

弘 孝 代 孝 澄 風 孝 弘 同 美 風

コスモス

原田千町 捌

街騒やコスモスのいる玻璃扉越し
 高速道路仰ぐ昼月
 秋の鮎化粧塩ふるてのひらに
 紙の袋が隅にそのまま
 尺八を習へば芸の筋もよき
 水でっぽうで遊ぶ子供等
 麦藁帽まぶかに被り遠会釈
 ドーベルマンに甘えられたる
 新妻のまだ知られざる酒の癖
 やんごとのなき枕絵の主
 論語から施政演説稿起す
 おほきな穴がポケットの中
 夜神楽のまんまる月が山脈に
 今川焼きのほかほかと湯気
 いんぎんな聞き込み刑事に疲れ見え
 増えるばかりのポートピアブル
 てすさびの轆轤廻すも花の頃
 孔雀ついでむはこべたんぼぼ

千元正 貞 町 子 江 哲 同 江 元 哲 貞 江 元 江 元 貞 町

木母寺の大念仏の雨となり
 一步踏み出す注意信号
 電動で鉛筆削りきりがなく
 時差のたし算時差のひき算
 波寄するコペンハーゲン人魚像
 胸のふくらみぢかに革ジャン
 「叔父さま」と声のかすれて上気して
 納屋の梯子に綱のぐるぐる
 蟻地獄そばに鳥獣供養塔
 賭ければまたもジャイアンツ勝ち
 三日の月孫の便りは漫画入り
 銀杏炒って小楊枝に刺す
 とうがらし漆喰壁にゆれてゐて
 茂吉、茂太に杜夫、怪妻
 夢の字を染めたる帯を形見分け
 珈琲の香のただよふてくる
 西東まだ見ぬ花を尋めゆかむ
 春の弥生に友を待つ苑

江 哲 江 元 貞 同 江 同 貞 哲 同 江 元 貞 町 哲

